内モンゴル研修旅行

2012年9月4日(火) - 9月9日 (日)

屋根の茅葺きの合間を縫って、つちのいえのメンバー11名で留学生珊娜(サンナ)の故郷、中国の内モンゴルへ研修旅行に行った。

■目的：内モンゴルの遊牧文化におけるものづくりの技術・素材・風土の連関について
■旅程：
9/4（火）関空〜南京〜呼和浩特（フフホト）_同市内ホテル泊
9/5（水）呼和浩特〜克什克騰旗（ヘシグテン）（バスで移動）_克什克騰旗泊
9/6（木）克什克騰旗〜阿斯哈図石林・草原ツアー _克什克騰旗泊
9/7（金）克什克騰旗〜呼和浩特（バスで移動）_同市 珊娜実家泊
9/8（土）呼和浩特 市内見学（旧市街、博物館等）_同市 珊娜実家泊
9/9（日）呼和浩特〜上海〜関空

5日は朝8時に出発。呼和浩特（フフホト）から約700km東の克什克騰旗（ヘシグテン）へ約10時間に及ぶ小型バスの旅。

参加者：
江川　恵
岡村真友子
佐々田美波
佐藤亜美
佐藤悦子
宮崎佳奈
珊 娜（サンナ）
清水みゆき
前田菜月
むらたちひろ
井上明彦

2日目 (9/5)

昼食で立ち寄った食堂が庶民的で、内モンゴルの人々の人情や暮らしぶりに初めて触れた。

内モンゴルの食生活は羊が中心。羊の頭が三つ無造作に器に浮かぶ。彼らは草原の夢を見るか？

食堂のおかみさん。ジャガイモ炒めをふるまって下さった。

食堂近くの小さな村に足をのばして、土の使い方を調査する。細い茎で粗い小舞のようなものを編んで、草を混ぜた土を塗った仕切り壁。

ぶ厚い土壁の建物。人家ではない。乾燥地らしく、屋根も草を混ぜた土を塗っている。屋根が落ちているので構造がよくわかる。

型を使って土と草を混ぜてつくった土塊を積み上げただけの仕切り壁。土塊はすぐに崩れる。公共の建物はレンガに漆喰塗り。

トイレは食堂から数10m離れた草原にぽつんとある。便器はなく、床に大きな糞尿槽がぽっかり口を開けているだけ。

3日目 (9/6) ヘシグテンはあちこち開発工事中だったが、郊外では1700頭もの羊の大群と出会った。サンナが羊の群れを見るなり、「食べた〜い」と言った。さすが。

サンナの案内でヘシグテン・ジオパークへ。中国の観光地は格好つけた建物が多い。

1〜3_ヘシグテン・ジオパークの阿斯哈図(アーシャツ)石林は、氷河期に噴き出した溶岩が急冷されてできた。花崗岩の奇観が連なり、七仙女、蛙石、飛来石、北京原人、あるいは絶望的唐僧などと名前がつけられている。

4_石と石のあいだに小枝を差し込んで支えるようにしている。御利益があるらしい。

5_モンゴル語で「オボー」と呼ぶ石積みの祭壇。オボー祭祀は、戦後の土地改革と文化大革命で壊滅の危機に追い込まれたが、1980年代に復活し、今は観光資源の目玉になっている。右に3周、左に3周して祈りを唱えるとご利益がある。回りながら遊牧文化の蘇生を祈る。

鷹そっくりに見える奇岩。

3日目 (9/6午後)

テシグテンへの帰り道、草原に直径10mくらいの骨組みだけの大きなゲルを見つけた。

通常の2本の木の支柱の代わりに鉄フレームでやぐらが組まれ、天窓のある頂点を支えている。真正のゲルではなく、観光用と思われるが、木組みの構造がよくわかった。

4日目 (9/7)

ヘシグテンからフフホトへ、また700km、10時間のバス旅。
途中、地平線のかなたまで続く、長大な長距離トラックの動かない列に遭遇。どこまでも途切れない。運転手はしばしば車中で夜を明かす。多くは輸出用の物資の輸送と聞いた。急速な経済成長で、加速的に膨張する物流に道路建設が追いつかないのだ。

ヘシグテンからフフホトへの帰り道、トラックの無限渋滞に出会う。

フフホトの旧市街は開発工事のために掘り返されている。至るところ、新旧の建物の対比が目立つ。

5日目 (9/8)

フフホトも大規模な開発工事が進み、古い街並みがどんどん壊され、ビル建設のために地面が掘り返されていた。内モンゴルは政府の同化政策で今や8割近くが漢民族。モンゴルの遊牧文化は、真新しい博物館の陳列物と化している。政府は観光と博物館化で少数民族を大事にしていると嘯く。

工事の瓦礫で埋まるフフホトの旧市街をフィールドワークする。

内モンゴル博物館。多額の資金を投入した建築は、遊牧民の生活文化や風土とは無縁のバブルの臭い。

朝の市場通りは活気にあふれ、肉、魚、野菜などが思い思いの露店で売られる。

町の中心にある満都海公園では、毎朝、多くの人が体操やコマ回しや水書道に興じる。ダンスしている若者たちもいて、つちのいえメンバーもいっしょに参加して踊った。

モンゴルでは朝は羊肉、昼も羊肉、夜も羊肉。前の晩に残った羊肉は、次の朝、切ってバター茶に入れて食べたりする。
サンナのお母さんには、おいしい手づくりの夕食や朝食を提供いただき、いろいろ料理も教えていただいた。

ダイナミックな肉の売り方。朝の市場通りで。

町の若者たちといっしょに踊るつちのいえメンバー。

シュウマイをつくるサンナのお母さん。

骨だけをきれいに残す上手な食べ方を教わる。

「つち」の「いえ」

むらたちひろ

2011年大学院染織専攻修了
最近の主な展覧会：
2021「時を植えて〜桐月沙樹・むらたちひろ」京都芸術センター
2020「すべとしるべ2020 #01：時の容/when it goes」オーエヤマ・アートサイト/京都
2019・2016「京都府新鋭選抜展」京都文化博物館
2018 個展「Internal works/境界の渉り」Gallery PARC/京都
2018「ほしをみるひと〜藤原隆男京都市立芸術大学退任記念展」Gallery@KCUA　ほか

私が体験した「つちのいえ」は、草刈りや竹組み、土の採取など作業を積み上げて少しずつ形になっていく段階でした。土壁の解体・再生をはじめ様々な技や知恵を学び、自分たちの「つちのいえ」をつくる方法を探る過程は、「つち」とは何か・「いえ」とは何か、ということから探究した時間だったように思います。大袈裟なようですが、議論や研究というよりも、素朴な疑問や偶然できた形に対して、自然に向き合える場だったのだと思います。当時の私は、そんな体験を自身の制作に活かす余裕はありませんでしたが、大学を出て10年経とうとする今、興味関心の開き方として大きく影響を受けていると感じます。

そんな「つちのいえ」の体験は杏掛に収まらず、2012年には有志メンバーで内モンゴルに出かけたこともありました。この旅は、漆工に在籍していた内モンゴル出身のサンナさんの故郷を訪ねるもので、私は大学を出て働いていましたが、メーリングリストでふと旅の計画を目にし、思い立って参加しました。美味しい羊料理を堪能しつつ、雄大な大地と急速に開発が進む街を訪れながら、その土地に根付く文化や民族意識を色濃く感じ、その印象もまた私の中で漂い続けています。

今振り返ると、学生として過ごす期間はあっという間だと改めて思います。前期・後期・年度で区切られる授業が多いなか、「つちのいえ」のように長期的に取り組まれるプロジェクトに参加できたことは幸運でした。私が参加したのは初期段階でしたが、井上先生は初めから長期スパンで、終わりを決めずに取り組まれていたのではないかと思います。だからこそ、そこで遭遇する興味や問題意識が、長い時間軸で視野を広げ続けてくれるのだと思います。

むらたちひろ《一滴の出来事 /when it drops》、《 今 /this moment 》展示風景、2017　撮影：志儀駒貴（photo by Shigi Komaki）